こども食堂の”価値”を「見える化」する

さくらプロジェクト

（2019 - 2022年度）

報告書

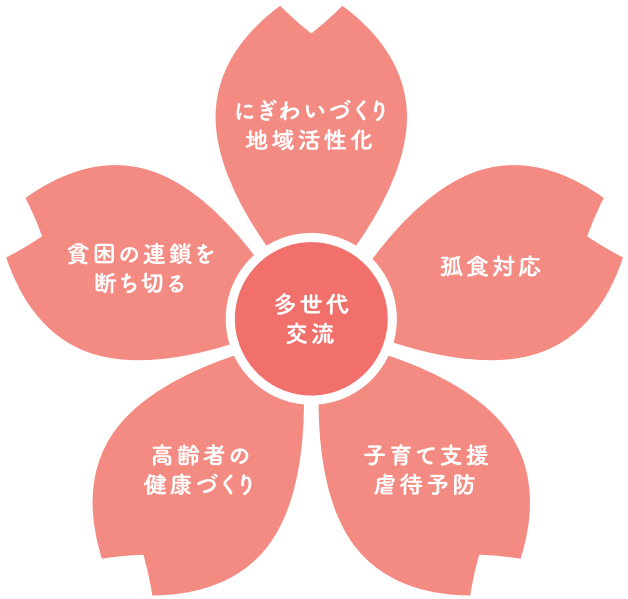
［サマリー版］

認定 NPO 法人
全国こども食堂支援センター・むすびえ
（支援：三菱商事株式会社）

共同実施
株式会社ブルー・マーブル・ジャパン

1 さくらプロジェクトの目的

全国こども食堂支援センター・むすびえ（以下、むすびえ）は、「こども食堂の支援を通じて、誰も取りこぼさない社会をつくる。」をビジョンに掲げる団体である。**「こども食堂が生み出す価値」を可視化**して、社会に適切に伝えていくことで、こども食堂の取り組みをさらに広げていくために、こども食堂が持つ多面的な社会的価値、効果を示すための「さくらプロジェクト」を2019年度から2022年度まで実施してきた（支援：三菱商事 株式会社）。本資料は、さくらプロジェクトの報告書のサマリー版である。



こども食堂は、全国的な関心の高まりの中で、子どもの貧困対策の一環の取り組みとして捉えられがちである。しかし実際は、地域の子どもからお年寄りまでが集うその多くが全世代型の「多世代交流拠点」として機能し、包括的・複合的な価値を地域・社会に提供しており、その効果も多岐にわたると考えられる。

むすびえでは、あらかじめこども食堂の効果を、1）地域活性化、2）子どもの貧困対策、3）孤食対応、4）子育て支援・虐待予防、5）高齢者の健康づくりの5つのバリュー（価値）として集約し、中央に「多世代交流」を配置した「さくらの花びらモデル」を構想した。

2 さくらプロジェクトの歩み

以下に、さくらプロジェクトの３年間の歩みをまとめる。こども食堂が持つ複合的な価値を可視化、言語化するために、評価モデルの構築と実施をプロジェクトの主眼とした。

[さくらプロジェクト（特に評価モデルの構築）において大事にしてきたこと]

1. 現場のこども食堂とその活動を支える地域ネットワーク団体が「参加型」で評価手法の構築を行うこと ▶ 全国のこども食堂と地域ネットワーク団体に協力いただき、実情に合わせた評価の議論や実証を行った

2. こども食堂がもつ性質にあわせて評価アプローチを検討し評価モデルを開発すること ▶ イノベーションの評価に用いられる発展的評価※1を基礎に評価の枠組みの構築を行った

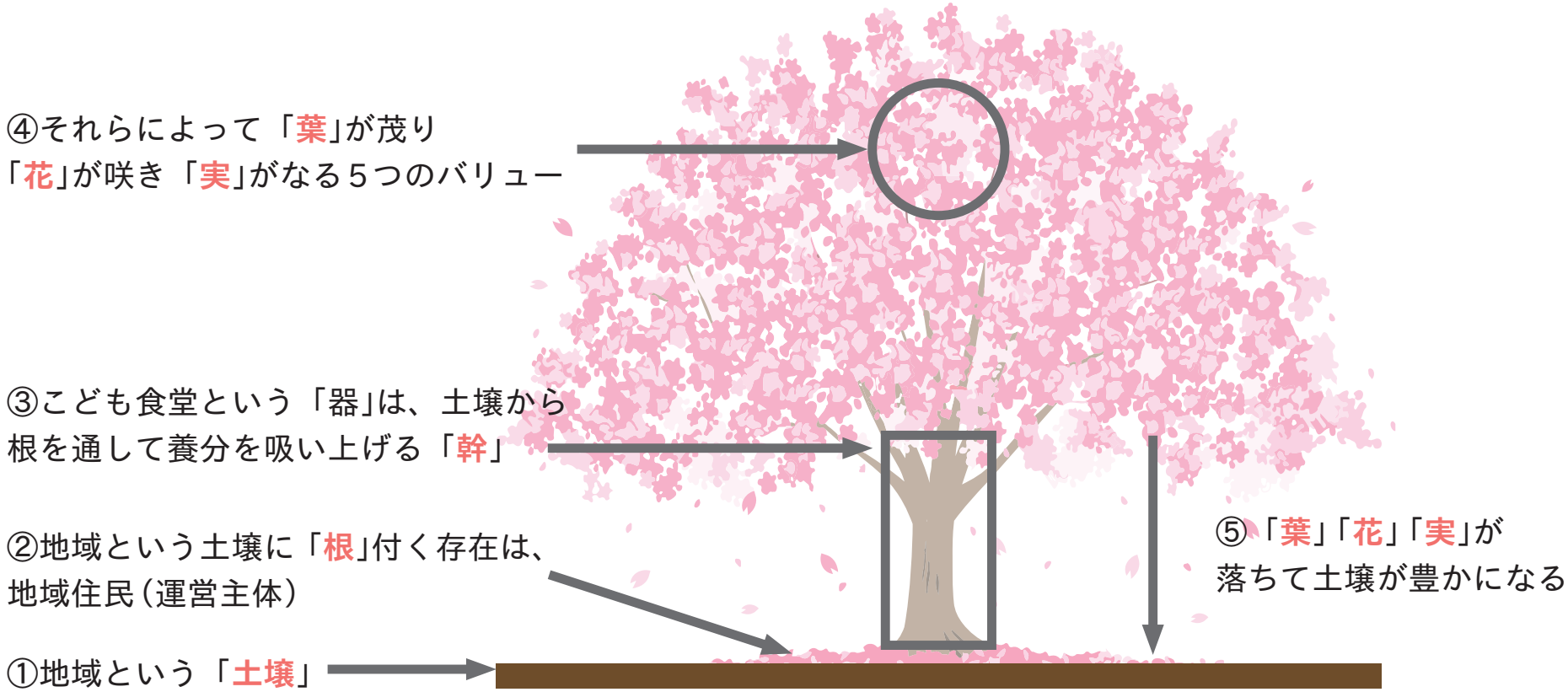
	2019-2020 年度	2021 年度	2022 年度
位置付け	評価のための基礎調査や関係者との協議	評価モデルの構築	評価モデルの活用
成果物	・５つのバリューが生み出される「さくらの木モデル」の整理（次スライドに記載）	・地域ネットワーク団体のセオリー ・２つの評価ツール（MSC※2ツールキット、サポートキット）を参加型で開発	・MSC 実施の結果 ・サポートキット実施の結果 ・全国調査データを活用した二次調査結果 ・こども食堂の多様なステークホルダーで議論する価値研究会の開催記録

※１：発展的評価：社会イノベーションなど、目的が固定されているというよりも目的自体が変化し、時間軸も予め設定されているというよりも流動的で前進的な対象を評価するための評価のやり方である。そこから得ようとするのは、外部への説明責任というよりも、イノベーションや変化から学習することである。

※２：MSC：Most Significant Changeの略で、多くの利害関係者（ステーク ホルダー）が関与する参加型モニタリング･評価手法である。

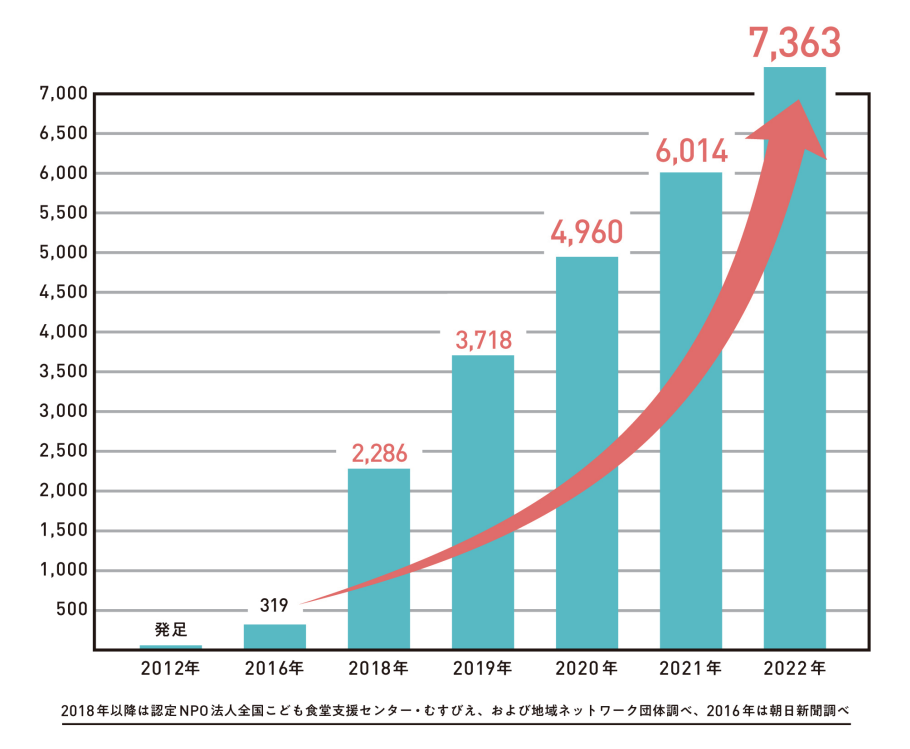
2 さくらプロジェクトの歩み（補足）

2019-2020年度の調査によって、5つのバリュー等の関係性の深掘りを行った結果、以下のように「さくらの木モデル」の整理がされた。下図に示す①～⑤の循環自体がこども食堂の価値の源泉である、というイメージを表現したものである。



【参考】全国こども食堂数の推移（むすびえ独自調査より）

さくらプロジェクト開始時から終了時までの全国のこども食堂数の推移を示す。むすびえおよび地域ネットワーク団体が毎年行なっている箇所数調査によると、2019年度は3,718箇所で、2022年度は7,363箇所にまで増加している。3年間でおよそ2倍に増えている。こども食堂という活動は、制度の裏付けがあるものではなく、届出る必要性もないため、あくまでも調査の集計結果であるが、年々着実に増加していることがわかる。



※2023年2月確定値発表
（参考：全国の小学校は約2万校、中学校は約1万校、児童館は約4,000か所。）

3　こども食堂の価値を捉える評価アプローチ

こども食堂や地域ネットワーク団体の参加型で「こども食堂が生み出す価値」を可視化するための以下の２つの評価ツールを開発し、実証した。

さくらの花びらサポートキット

- 主に指標（数字が多い）を扱う評価手法
- こども食堂運営者が指標に基づいたデータを収集して、気づきや運営改善につなげる想定で開発
- 発見編により、５つのバリューに照らした食堂タイプを診断する
- 診断結果をもとに指標を選定し、データを収集

MSCツールキット

- 主にエピソードを扱う評価手法
- こども食堂運営者たちがワークショップで使う想定で開発
- ワークショップ参加者同士で「重大な変化の物語」を共有しあい、その中から「もっとも重大な変化の物語」を決める
- 関係者と価値基準の明確化と合意形成を目指す

4 こども食堂の価値を捉える実践結果と考察 ［1］MSC 概要

MSCツールキットは、エピソードを扱う参加型の評価手法であるMSCをこども食堂の運営者が活用しやすいように簡略化して、ワークショップ形式としてまとめたものである。「概要編」と「実践編」の２本の動画を制作した。以下に示す３ステップからなる。

概要編

https://www.youtube.com/watch?v=iZxMHwzeNHI&t=1s

実践編

https://www.youtube.com/watch?v=_QQQQYWpGBg&t=20s

MSCの３ステップ

ステップ１：こども食堂の現場から「大事にしたい変化のエピソード」を集める

ステップ２：みんなから出た「もっとも大事にしたい変化のエピソード」の中から「もっともすげーチェンジ」を選ぶ

ステップ３：なぜ、その物語が「一番大事にしたい変化の物語」として選ばれたかをみんなで確認する、噛み締める

4 こども食堂の価値を捉える実践結果と考察 [2] MSC 実践

代表的なMSCエピソードの例と価値判断の例を示す。MSCを用いた評価実践からは、様々な価値領域に該当する多様なエピソードが出てきて、その価値判断の基準も様々であることがわかった。

代表的なMSCエピソードの例（佐賀県）

子どもたちがSOSを出してくれるようになった

本当に居場所が必要な子が来るようになった。「ここにいたい！」「明日もくるけんね」と言ってくれる以外にも、自分のことなどを話してくれるようになるほか、「昨日警察が来たんよ」というような、家のなかのプライベートなことも教えてくれるようになった。

価値判断の例（佐賀県）

［左記エピソードへの投票理由の例］

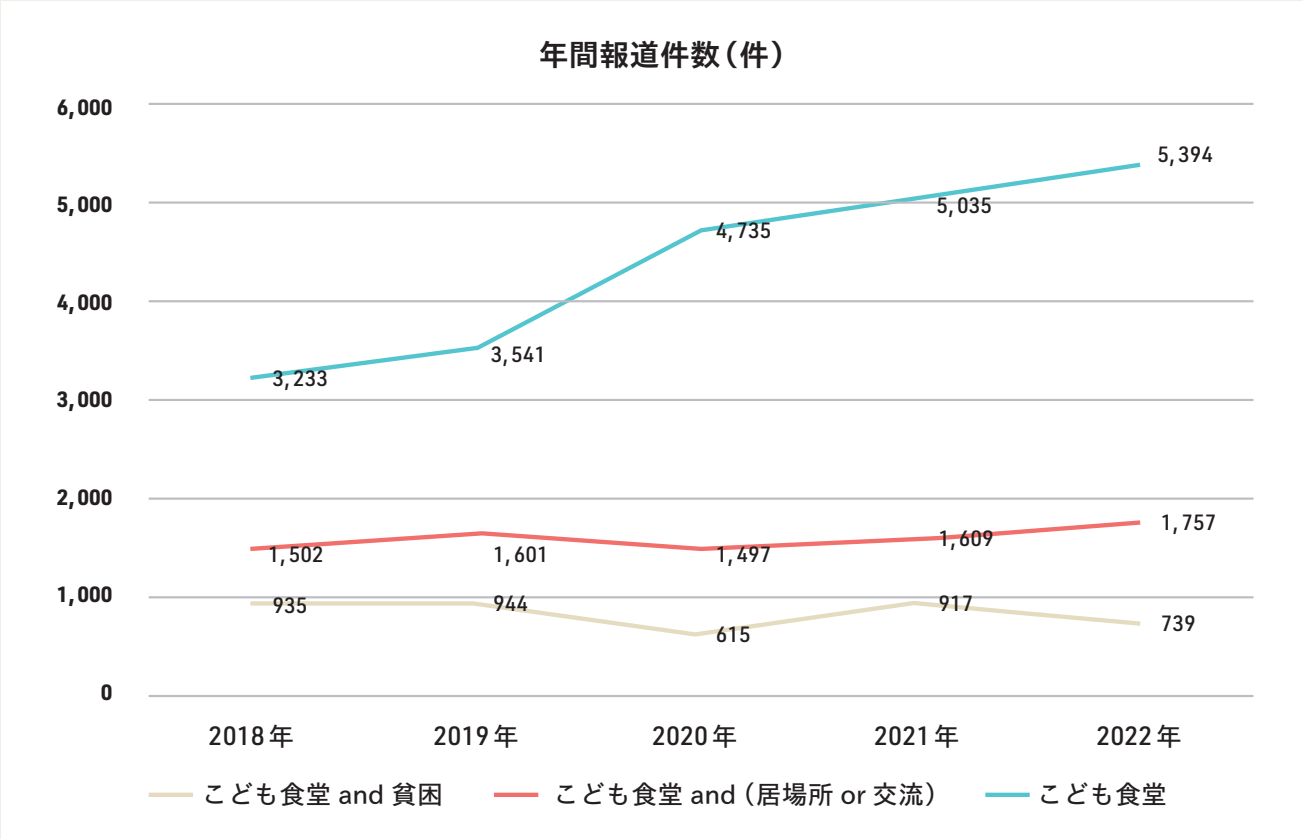
学校で起こった嫌なこと・愚痴など親に言いづらいことを言える関係になれたことが嬉しい。パブリックな場所ではなく「お家」だからこそ言えること。それがこども食堂の役割ではないかと思った。

さくらプロジェクトでは、全国合計８拠点でMSCワークショップを運用して、そのうち６拠点（青森県、滋賀県、諏訪圏域、佐賀県、岩手県、埼玉県）で「もっとも重大な変化」である”M”(Most)の物語を決めた。この”M”を決める際の価値判断の理由を見てみると、「子どもの視点」や「地域の視点」で価値判断がされていることが共通点として見出された。上記の例では、「子どもにとって嫌なことや愚痴など、プライベートの困りごとも含めて話せる関係性が構築できていること」というような価値判断基準であると言えるだろう。

MSCを用いた評価実践からは、様々な価値領域に該当する多様なエピソードが出てきて、その価値判断の基準も様々であることがわかった。

【参考】こども食堂に関する報道の変化（むすびえ独自調査より）

こども食堂に関する報道は、年々増加している。その中でこども食堂を「貧困」のワードに結びつけた報道は減少している傾向があるが、一方で「居場所」または「交流」のワードに結びつけた報道は増加傾向であることがわかる。このグラフを見ると、メディアでの取り上げられ方にも変化が生まれてきたことがわかる。



4 こども食堂の価値を捉える実践結果と考察 [3] サポートキット開発

さくらの5つの花びらをベースに、こども食堂自身が自分たちの活動の価値領域を認識し、その価値を評価する仕組みとしてさくらの花びらサポートキット（以下、サポートキット）をこども食堂の評価モデルとして開発した。2021度は、こども食堂が大切にしていることを中心とした価値を意識化し、測定し、運営改善に活かす一連の仕組みづくり（「発見編」と「運営編」）、2022年度は、その試験的運用を行った。

サポートキット（発見編）の画面の一部

さくらの花びらサポートキット 発見編

さくらの花びらサポートキット「発見編」は、こども食堂を運営する あなたが、
「私が運営するこども食堂は、何を大切にしたい/しているんだろうか?」
と思ったときに、その「発見」をお手伝いするためのツールです。

所要時間は2-3分程度です。

フォームで簡単な質問に答えると、あなたのこども食堂のタイプがわかり、地域での役割や運営についてのヒントを得られるかもしれません。
また、そのあとの「運営チェック編」では、定期的な振り返りができるツールをご紹介しています。
あなたが運営するこども食堂が大切にすることを見える化し、チェックするお手伝いとして、サポートキットをご活用ください。

※さくらの花びらサポートキットは、むすびえ（全国こども食堂支援センター）が、こども食堂の自己発見ツールとして、（株）ブルーマーブルジャパンとの協力で開発しているものです。

※フォームのデータは、下記のリンク先のプライバシーポリシーに基づいて取り扱います。
https://musubie.org/privacy/

Google にログインすると作業内容を保存できます。詳細

さくらの花びらサポートキット 発見編

Google にログインすると作業内容を保存できます。詳細

*必須

地域の理解、関心について

地域の方に今よりこども食堂への理解、関心を持って欲しいと思う？ *

- とても思う
- まあまあ思う
- どちらでもない・思わない

戻る　次へ　2/13 ページ　フォームをクリア

このように簡単な質問にいくつか答えると、食堂のタイプが診断される

サポートキットの実施にご関心のある方は、以下にご連絡をお願いします。

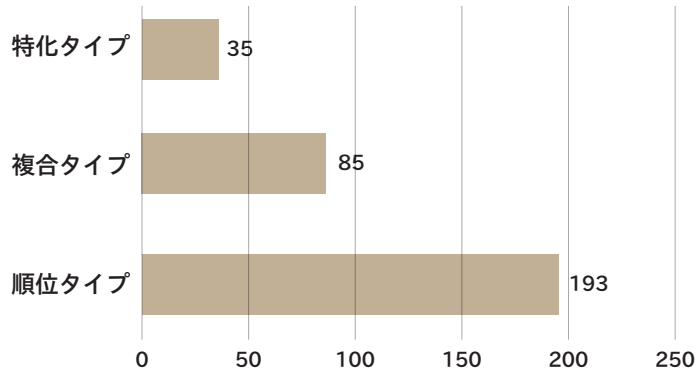
むすびえ問い合わせ先
https://form.run/@musubie-contact

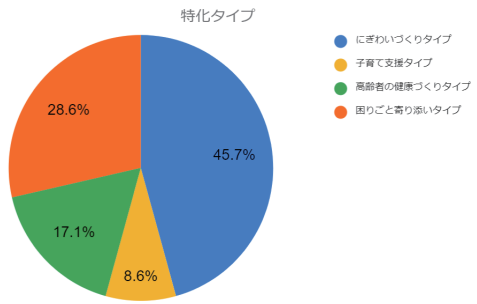
4 こども食堂の価値を捉える実践結果と考察 [4] サポートキット発見編の結果

発見編の結果のまとめは、以下の通りである。さくらプロジェクトでは、313件のこども食堂が「発見編」に回答した。

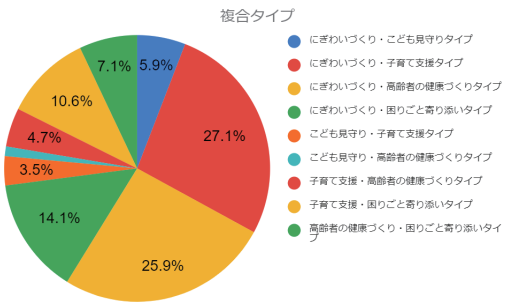
- **順位タイプが過半数以上を占める。**順位タイプの中でも、地域で子育て・困りごと寄り添いタイプが多いことがわかる。
- **特化タイプが少ない**のは、どれかのタイプに特化することで、その要素に当てはまらない状態の人が来にくくなったり、スティグマ（偏見）からこども食堂に行くことを敬遠するといったことが起こっていることから少なくなっているのではないかと推察される。

特化タイプ	こども食堂の運営において大切にしたいと考えている価値が、5つのバリューのうちどれか1つに特化している食堂タイプ
複合タイプ	こども食堂の運営において大切にしたいと考えている価値が、5つのバリューのうち2つのものが複合している食堂タイプ
順位タイプ	こども食堂の運営において大切にしたいと考えている価値が、5つのバリューのうち3つ以上ある食堂タイプ

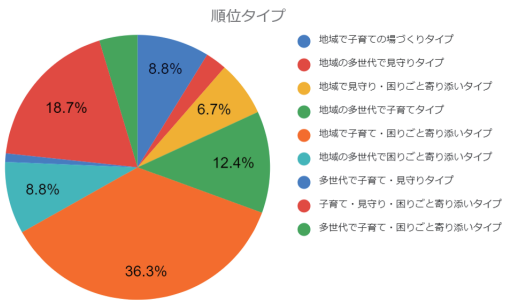




特化タイプ
35件／313件



複合タイプ
85件／313件



順位タイプ
193件／313件

4 こども食堂の価値を捉える実践結果と考察 [5] サポートキット運営編の結果

2022年度には、地域ネットワーク団体5団体の協力も得ながら、合計33食堂がこのサポートキットを使った運営編（指標に基づいたデータ収集、運営チェック）の取り組みに参加した。各食堂が価値タイプに応じた指標を独自設定して、概ね毎月指標に基づいてデータを収集した。

- 参加した食堂によって設定された指標については、子どもに対しての指標が74件と最も多く、次いで保護者に対する指標（48件）、参加者全員に関する指標（17件）、地域に関する指標（15件）、高齢者に関する指標（7件）とこども食堂の受益者に関して設定されている。他に、運営者・ボランティアに関する指標（14件）も設定されており、5つのバリューにとどまらず、食堂の運営改善のための指標設定も行われた。
- 5つのバリューのうち「にぎわいづくり」「子育て支援・虐待防止」「貧困の連鎖を防止する」の3領域に価値を置いている食堂では、子どもに対しては「挨拶」や「会話」を指標として設定し、スタッフやボランティアと挨拶や会話ができるようになったかどうか、参加者同士でどのようなやりとりが行われているかなどを見ようとする傾向にあった。
- 実施している地域が違うが同じタイプの食堂の場合、見ようとする指標が同じものもあれば、まったく別のものもあり、その地域特性や食堂運営者の課題意識に応じて指標選択が行われていることがわかる。
- 食堂により設定する指標の数は様々であり、一つだけ設定したところもあれば10個以上設定したところもある。また、データ収集の途中で指標を変更したり収集するデータを取捨選択したところもある。

タイプ	食堂名	地域	運営チェック項目の決定		
			誰の変化	チェック項目	理由
地域で子育て・困りごと寄り添いタイプ	Glück（グリュック）	諏訪	子どもたち	挨拶や会話	子どもたちは、最初に参加した時には挨拶や会話は少ないが、意識的に運営者から挨拶したり、話しかけていくうちに、徐々に話したり、挨拶したりできるようになる。
地域で子育て・困りごと寄り添いタイプ	新旭駅前ふれあい食堂	滋賀	子どもたち	自ら挨拶をすること	会話をすることが、子どもたちが成長すると思っている。登下校の見守りにも参加しているメンバーが半数近くおり、道端であっても挨拶する。年々成長しており、ご飯たべたら個々に「ありがとう」とおばちゃんに言ってくれる。支援者との関係性もあらわすし、将来につながる。
地域で子育て・困りごと寄り添いタイプ	スマイル甲賀大原っ子	滋賀	子どもたち	自ら挨拶をすること	帰りのタイミングで、子供が、心から「ありがとう」というのか、表面的にいっているのか知りたい。習慣になっているか知りたい。

運営編　タイプごとの運営チェック項目の例

こども食堂の価値は名前に現れる

こども食堂の名前から読み取れることがあるのかかを検討するために、第１回全国こども食堂実態調査に回答のあった1,383団体の名称からこども食堂の価値を読み解いた。

「こども」「子ども」「子供」「キッズ」という言葉を含むこども食堂の名称は662団体、**49.4%と約半数**である。

残り約半数のこども食堂の名称に含まれる言葉で多かったのが右記の通り、**「みんな」「地域」といった多様な人**を指す言葉を含んでいる団体が多い、という結果になった。

この結果は、「こども食堂の活動を多様な人に届けたい」、「こどもだけでなく地域のみんなの居場所でありたい」などという運営者の意図が名前にも表れているといえると考える。

含まれる言葉	団体数
* みんな *	86
* 地域 *	37
* わいわい *	25
* スマイル *	21
* なかよし *	17
* コミュニティ *	14
* わくわく *	12
* にこにこ *	10

5 まとめ・考察

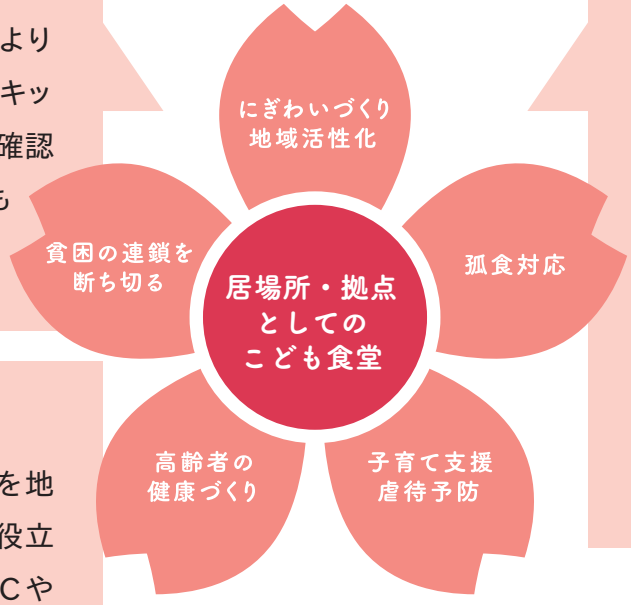
さくらプロジェクトの実践により、**こども食堂の価値は複合的に考えるという学びが得られた**ことは強調しておきたい。具体的には、**さくらの花びらのそれぞれのバリューを複合的に考えること、５つのバリュー以外の価値も考えること、そして５つのバリューだけでなく中心にある「多世代交流」や「居場所」という内在的価値も取り扱うこと**などである。前述の通り、サポートキットの実証では、特化タイプだけでなく、複合タイプ・順位タイプも考慮して設計を行なったが、実際のデータとしても特化タイプよりも複合タイプ・順位タイプが多く現れており、こども食堂の価値を複合的に取り扱うべきであるという教訓が得られた。

５つのバリューのデータによる裏付け

５つのバリューの仮説は本プロジェクトの実施により一定程度裏付けられた。MSCの実証でも、サポートキットの運用においても、こども食堂の多様な価値が確認されている。したがって、５つのバリューは、こども食堂の価値を考える上での今後も指針となりうる。

５つのバリュー以外の価値の例

５つのバリュー以外の価値として、「地域課題を地域住民が発見すること」、「地域の防犯・防災に役立つこと」、「女性の活躍の場になる」などが、MSCやサポートキットや価値研究会の議論で挙げられた。



５つのバリューの中心から見えてくる「地域の居場所としてのこども食堂」

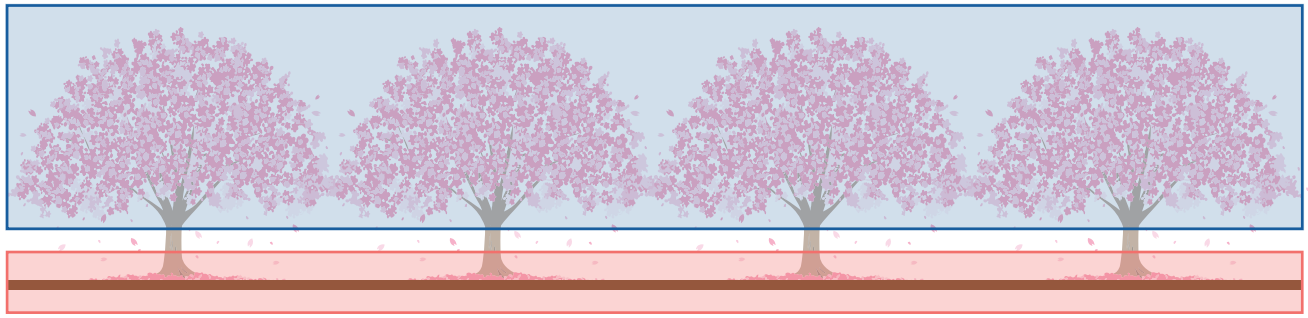
５つのバリューの中心部に位置する「多世代交流」や「地域の居場所としてのこども食堂」についても注目しておく必要がある。つまり、こども食堂という場に多世代が集まりそこで様々な人たちと交流できること、利用者同士が知り合い、自然とつながっていくという**こども食堂という場そのものに価値がある**という考え方ができる。

6　今後に向けて ～こども食堂の価値の扱いをさらに発展させるために～

居場所そのものの価値の考察へ（試論）

こども食堂の活動によって生まれるバリューは地域特性や地域課題と対応すると言える。そのためこども食堂の数だけ、多様なバリューが生まれていることになる。そうするとその様々なバリュー（報告書では「結果としての価値」とも表記）が生まれる根源的な部分、すなわち**さくらの５つの花びらではなく、中心部（本質的価値／内在的価値）に着目していく**ことが必要である。さくらの花びらの中心部には「多世代交流」があるが、子どもが核となるつながりが生まれているか、こども食堂の懐の深さなどの**「多世代交流」や「居場所」の質に注目していくことが必要であり、これが「意図的に高めていくべき価値」と言えるだろう。**

さくらプロジェクトの実施により、様々な価値が生まれる根源であるこども食堂という「居場所そのものの質」への着目が時代の要請でもあることが読み取れる。 これがさくらの木モデルでいう土壌や木の根の部分に対応するもので地域づくりに普遍的な視点をもたらすものであり、今後はこの方向で「居場所そのものの質」を捉えるための取り組み (評価の仕組みの構築) を進め て、社会実装や啓発を進めていくことが望ましいと考える。



こども食堂の活動によって生まれるバリューは、**地域特性や地域課題と対応**する。
そのためこども食堂の数だけ、**多様なバリューが生まれている。**

さくらの木（こども食堂）が育つために必要な**土壌の豊かさは共通**である。
それが**人と人とのつながりが生まれるため**の仕掛けである**「多世代交流」、「居場所」**である。